刊行にあたって

1983年、オッセオインテグレーテッドインプラントが本邦で初めて臨床導入されてから、早くも30年が経過した。その間、歯科医療のなかでインプラント治療は様々な変貌を続けてきた。2012年には、「インプラントバッシング」、「インプラントネガティブキャンペーン」などのタームが定着するに至るほど、インプラント治療に関わる不具合が取り沙汰されることとなった。

翻って、さかのぼること２年前に「種々の生物学的・機械的なトラブルの報告とその対応に直面し、確実で安全な施術を進めるためのポイントを臨床的手技に絞って教示すること」を目的として企画されたのが本書である。インプラント治療に対する先見性がうかがえ、本企画への参加をお許しいただいたことに心より感謝している次第である。

インプラント治療に関わる不具合については、急性炎症や神経症状を伴う外科的偶発症が一般に大きく取り上げられるようになり、私自身の日々の臨床においても、終了したインプラント治療の形態や機能に満足を得られていない患者が少なくない。そこで私が感じるのは、「神様が創られた天然の歯や歯肉と、インプラント治療で得られる結果が異なる」ことへの理解が術者・患者の双方に不足していることである。インプラント治療では、天然歯と異なる形態のものが、天然歯に対する治療法とは異なる手技によって適用されることが望まれると考える。加えて、経過で生じる生物学的な変化に対して求められる対応法も、天然歯に対するそれとは異なるであろう。もし医療サービスを提供するサイドにこの認識が欠如していれば、当然のように患者は適切な情報を得ることなく治療を受けることとなり、治療結果に対する失望を生むことに繋がる。

本書は、天然歯に求められる治療を緻密かつ丁寧に行うことがインプラント治療における補綴的対応の基本となるとともに、天然歯への対応とは異なる部分について明らかにすることを念頭に置いて構成されている。本書がインプラント治療に求められる補綴的対応の理解の一助となり、患者の喜びへの橋渡しとなれば望外の喜びである。

関根秀志